〈熊沢蕃山の思想冒険〉　目次

序　論　蕃山思想の研究と方法……3

第一部　蕃山思想の前提……9

第一章　中江藤樹の『翁問答』の思想……11

第二章　池田光政の藩政改革……25

第二部　蕃山思想の形成……45

第一章　思想形成と『源語外伝』の思想……47

第二章　『集義和書』初版の思想……66

第三章　『集義和書』二版の思想……82

第三部　蕃山思想の展開(一)……97

第一章　『集義外書』の思想……99

第二章　『中庸小解』と『論語小解』の思想……118

第四部　蕃山思想の展開(二)……131
第一章　『女子訓』の思想……133
第二章　『三輪物語』と『大学或問』の思想……147
第五部　蕃山思想の展開(三)……165
第一章　『孝経小解』と『孝経外伝或問』の思想……167
第二章　『大学小解』・『夜会記』・『繫辞伝』・『易経小解』の思想……181
結　論……193
初出一覧
あとがき
索　引(人名・事項)

序　論　蕃山思想の研究と方法

熊沢蕃山（一六一九～九一）の思想の研究は、尾藤正英氏の『日本封建思想史研究―幕藩体制の原理と朱子学的思惟―』によって始められた。ここではまず、「蕃山における日本の「水土」への関心は、儒教の精神を日本へ移植するに当り、その本質に関わりなき面を削ることにより、抵抗を少くしようとした努力のあらわれであって、いわゆる日本的道徳の自覚を意味するものではなかった」とし、蕃山の思想を「朱子学と陽明学との中間的立場とみなしておくほかはないであろう」と把握し、「朱子学と戦国武士の伝統とを結びつけて、幕藩体制の政治的原理に正面から批判的姿勢をとろうとした」と評価している。(1)

牛尾春夫氏は『熊沢蕃山　思想と略伝』において、蕃山の学問を「（中江）藤樹と同じく唯心論的であり、主観的観念論に属」し、「陽明学的であることを免れるものではなかった」と把握し、「日本在来の神道を浅薄とし、儒学的内容を附与して、その体質を改善し、これを大いに活用することによって、日本的時処位に応じた政治を待望するものであった」と指摘し、さらに富有大業観を「天地の用い尽せない程の無尽蔵な造化を助けて仁政を行い、人民を富有にするという易理に従った造化参賛である」と主張している。(2)

後藤陽一氏は「熊沢蕃山の生涯と思想の形成」において、藤樹の『翁問答』に注目し、「道徳的行為の実践的意義は、その主体的側面からだけでなしに、常に時処位に規制される行動の社会的側面からの批判にさらされていなければならない」とした。しかし晩年の述作では、時所位論はほとんど影をひそめ、「行為主体の良知に至

る工夫として、むしろ観想的な論理にとどま」ると指摘した。そして蕃山もその影響を受け、「もっぱら絶四の工夫に心法をねることをつとめていた」と把握した。また「禁中とここに仕える公家の存続の意味を、源氏物語に読みとられる王朝文化の理念において理解しようとし」、さらに「抜本的な対策として、参勤交替制をやめ、武士の帰農と庶民のくつろぎをはかり、籾使いの経済に立かえり、天下文明の教を起し、富有大業の仁政の行なわれることを期して、直言に及んだ」と評価している。(3)

友枝龍太郎氏は「熊沢蕃山と中国思想」において、『集義和書』では「当初太虚一気の色彩が濃厚であったが、心法図解では、はっきり太虚理気の説を定立し、更にその後」、「理気一体のところを道と表現した」と把握した。また「天道」を「朱子にとって理は」「感じ働くものではなく、感じ働くものはすべて気であった。しかるに蕃山は、理の感を説き、理はそれなりに感応するものとする」とし、「人道」を「朱子の説が反映している」とし、「心法」を「全く朱子の即物窮理説の採用」と指摘した。さらに彼の経解を読めば、朱・王いずれも取り、また藤樹を取り、さらに蕃山独自の解が到る処に示されているのを発見するとして、「尾藤正英氏が、蕃山を「朱子学と陽明学との中間的立場」（日本封建思想史研究）とされたのは妥当な論である」と結論付けている。(4)

源了圓氏は『近世初期実学思想の研究』において、尾藤氏と同様に「蕃山を朱子学と陽明学の中間へ位置づけ」、「そのいずれをも超出するところに達していたと思われるが、理論の世界においては蕃山はまさに両者の中間にあり、そしてその理論的統一に成功していない」とし、その経世論の魅力を、㈠「彼が経世論を狭義の経済問題に限定しないで、その経済的問題のよって出たところの、幕府の幕府中心的政策そのものの批判から出発し、その文脈の中で経済問題を解決しようとし」た、㈡「彼の経世論の背後にある民衆への愛である」、㈢「蕃山の民本主義にもとづく経世論が国土論的発想につらなり、そしてそれが彼の自然の思想に裏うちされていることである」と述べ、さらに蕃山の自然の思想は、「一方では近代的自然観の批評に耐えない奇妙な面を含むとともに、

他方では大自然の一様態としての国土の中で民族が養われているという基本的考えに立って、大自然の営みに順った国土の合理的利用ということを考える点で生態学に通ずるような叡智を含む」と評価している。(5)

宮崎道生氏は『熊沢蕃山の研究』において、第一部で政治論序説・政治論策・幕閣との関係・史観と史論・宗教論・学問の進展と教育について考察し、第二部で山鹿素行・伊藤仁斎・新井白石・荻生徂徠・太宰春台の思想と比較し、「蕃山の儒学は後半生において著しく進展深造を続けるが、基本的には「心学」だったと認めてよいであろう」と把握し、「平易は言葉で民衆に語りかけ、道が近きにあることを示した蕃山だったからこそ、民衆の側からも蕃山に対し親近感を抱き、おのずから薫化されることになったのであろう」と評価し、(6)さらに注目すべき見解を次のように述べている。長文にわたるが重要なので引用してみたい。

蕃山の儒学観、ひいては中国観には変化はなかったと見られるのに対して（中国中心的文化観、聖人の中国唯一出生説〈後述〉等）、大きく変化してくるのが日本観である。前節既に述べた通り、蕃山の「源氏学」の成熟は明石在住期の後半以後、或いは郡山時代――天和年間（一六八一～八四）以後のことと推考され、それは日本古典学全般についても言えることと思うのであるが、それによって蕃山の儒学にも変化が現われるようになる。即ち、著名な「時処位」観に基づいて現時世下では儒法は日本に不適当であるとの考を抱くにいたり、道の普遍性を認めつつも――道と法とを区別――、日本の水土に即応した神道を説く態度にまでなっている。結局、道徳的規範・依拠としては、飽くまでも中国の儒教・儒道にそれを求めつつ、他方では日本自体にそれが備わり不完全ながら実現をも見ているとの見解に到達したのである。天照大神を呉の泰伯と見なし、『中庸』にいわゆる知・仁・勇の三達徳の現われが、皇位の象徴としての「三種の神器」であるとしたり、中国の古楽が日本にのみ伝わっていると述べたりしているところに、蕃山学進展の具体相が認められる。また人倫及び社会生活における根本問題の一つ、死者の葬法や祖先祭祀についての見解にしても、

『葬祭弁論』（寛文七年〈一六六七〉板行）が『朱子家礼』を準拠とし、火葬を否定したのが、『集義和書』ではやや論調がゆるめられ、後に『集義外書』に附加収録された「水土解」では、現状では（人口増加による土地の狭隘）火葬もやむを得ないという論に到達し、祖先祭祀については整備した周王朝時代のそれの適用は、本質的に易簡を好む日本人の性情には適しないし、また歴史的には今の日本では無理であり不適切でもあるとして「三年の喪」を斥け、祭法についても「もろこしの法」は用いがたいところがあるから、「日本の水土人情によりあまねく用ひて久しかるべき祭法」の実現を期待しているのである。(7)

この見解は蕃山の思想が明確に変化したことを明らかにした点で重要である。本書ではこの点に注目して、立論していきたい。

吉田俊純氏は『熊沢蕃山―その生涯と思想―』において、「蕃山の危機感は、非合理的宗教的な精神が基盤をなしている」として、「究極的にはこの解決を求めるのだが、蕃山の議論はそこにあるのではなく、その前提として当面する危機を、いかに解消するかに集中していた」と評価し、(8)さらに次のように主張している。

かくして蕃山は、このままでは神道も儒教も天皇制も滅びて、キリシタンの「畜生国とな」ると、危機感をいっそう深めるのである。もちろん、蕃山はこの鋭い危機感を抱いたが故に、より強く神道の再興と富有大業のための改革の必要性を説くのである。(9)

そして後に内憂・外患の危機のもと、権力が民衆の心をとらえていないと危機感を募らせ、そのために神道を天皇の下に再編し、国教化させることを提唱したのは水戸学であると指摘している。(10)この見解は、なぜ蕃山が神道に固執したのかという問いに答えるヒントを与えてくれる。

このように先行研究を整理してみると、これまでの研究は、蕃山が五十四歳の時に板行した『集義和書』初版、五十八歳の時に板行した『集義和書』二版、六十一歳の時に成稿したと推定される『集義外書』・『中庸小解』・

あとがき

前書『幕末・明治期の儒学思想の変遷』を出版してから、十六年の歳月が過ぎた。その後幕末期の思想家江木鰐水・池田草庵の研究や『井原市史』において興譲館の研究を行っていたが、研究の関心が熊沢蕃山・池田光政・中江藤樹に移っていった。

筆者は岡山に住んでいるので、岡山城・岡山藩学校跡・花畠跡などの蕃山の旧跡はよく知っていた。平成十七年の秋に終焉の地である古河市を訪ねた。古河歴史博物館の館長であった鷲尾政市氏から寄託された蕃山書簡を見せていただいた。そして隣の鷹見泉石記念館を見学し、さらに鮭延寺にある蕃山の墓を参拝した。翌年の秋には近江八幡市の桐原を訪ねた。竹林に囲まれた旧跡には「蕃山先生勉学処」の碑と略歴が立っていた。そして大津市の琵琶湖文化館で寄託された蕃山の書を見せていただいた。平成二十一年の春には備前市の蕃山を訪ねた。正楽寺の横の空地に息游軒碑があり、山田方谷邸跡や佐古田山に蕃山の両親の墓があり、夫婦ヶ鼻には関係者の墓があった。このような田舎のゆったりとした場所から京都に出ていった蕃山の心中を思った。この前後に大和郡山城・明石城・藤樹書院なども見学した。

これらの旧跡を歩きながら、『増訂蕃山全集』全七巻との格闘の日々が続いた。彼の不幸の原因は、若い時に藤樹の弟子として有名になり、もてはやされたことにあった。そして彼の主張が捉えがたい原因は、彼の境遇の変化によるものと思われる。三十九歳で岡山藩を致仕し、寺口村に退隠し、四十三歳の時、京都の上御霊へ移住した。四十九歳の時、京都所司代牧野親成によって京都居住を禁じられ、吉野山から山城鹿背山に移り、のちに在京が許可された。五十一歳の時には明石城下の中ノ荘に移り、翌年太山寺に転居した。

そして六十一歳の時に大和郡山矢田山法光寺に移り、六十九歳で古河に転居したのである。また光政との確執も暗い影を落としている。こうした浮草のような日々が、その時々の主張を屈折させたのであろう。

しかしすべての思想を相対化しえたのは、やはり彼の死生観であったと考えられる。「死して何もなくなりたる」、「草木国土迄も無より生じて無に帰す」という言葉こそ、その確信であった。儒教・神道・仏教は、明知の人がその時所位に応じて行った跡で、道の真ではない。私は仏教でも儒教でも神道でもない。どの教えにも偏らず、ただ朝廷の臣であるという主張こそ、彼の本領であった。朱子学・陽明学を受容しながらも、日本の近世の政治思想としてそれらを否定しなければならなかったところに、彼の政治体験の意味があり、報われぬ後半生の不幸に見合った輝きがあったのである。

尚、出版の機会を与えていただいた思文閣出版と出版助成をしていただいた就実学園にも深く感謝したい。

平成二十六年十月

山田芳則

農兵論　114

は行

幕政改革　159,161,167,201,202
藩学校　25,27,54
藩政改革　7,25,26,29,32,33,47,160,193,199,202
万物一体の理　72,73,89～91,195,196
評定場　84,85
評定所制度　39,41,194
福善禍淫(一の理、一の定理、論)　16,55,56,62,66,102,103,118,119,121,188～191,193,194,197～199,203,204
武士道　184,185,203
富有大業　3,4,6,157,160,161,167,174,177,182,201,202
兵農分離　78,79,82,87,88,93,195～197
卜筮　186～190,203
北狄の備え　158,160,161,167,202

ま行

『光政公御筆御軍書』　28
『三輪物語』　7,147,151,161,167,200,201
明君　28,91,107
明徳　12～18,22,50,107,171
『毛詩』　54
『孟子』　71

や行

『夜会記』　181,183,185,190,202～204
『大和西銘』　48,50
弓矢の道　183,185,203
陽明学(王学)　3,4,25～27,51,53,62,66,68～70,88,102,103,114,118,193～197,199,200,202

ら行

頼政廓　156
理気(一論)　70,73,89,195
良知　3,14,22,40,51,70,88,195
林政改革　158,160,161,167,201,202
輪廻　55,56,62,67,69,88,136,140,141,143,186,194,200
礼義作法　18,22,193,194
礼儀法度　141,142
六十四卦　186,188,203
『論語』　25,71
『論語小解』　147,197,199
『論語上巻小解』　7,118,124,128,199
『論語下巻小解』　7,118,128,199

朱子学　3,4,17,25,26,51,53,62,66,68～70,79,82,88,102,103,114,118,123,128,129,147,193～197,199,202
朱子家礼　6
「十界之図」　48,50
生滅々已　140,143,200
諸行無常　140,143,200
『女子訓』　133,134,136,143,167,200,201
「周南之解」　133
「召南之解」　133
「女子訓異同篇」　133
心学　5,16,33,48,193
親・義・別・序・信　14,71,107,108,114,198,200
仁・義・礼・知　71～73,89,195
仁・義・礼・知・信　14,51,107,125,128,181,199
心迹差別論　15,18,19,22,193
仁政(一論)　4,33,41,104,105,108,127,128,156～161,168,193,198,201,202
神道請　28
慎独　14,22
心法　4,18,70,72,124,135,168,170,181,182,186,190,202,203
心法図解　4
水土　3,5,6,100,102,106～108,197,198
「水土解」　6
聖学　40,88,125,128,142,199
聖人　13,17～22,40,53,55,67,68,71,72,77,85,87,89,118,119,136,137,139,140,148,150,151,154,170,173,186,190,193,195,199,201
造化　12,15,55,67,89,107,118,119,121,127,185,190
『葬祭弁論』　6,53
相対化　62,66,93,103,108,114,161,167,196,201,204
空間的相対化　105,108,114,198,199
時間的相対化　104,108,114,197,199
葬礼吊問の作法　105,108,198
『息先生道談』　86,93,196
『息游先生初年倭文』　51

た行

『大学』　47,71,72,171
『大学小解』　7,181,182,190,202,203
『大学或問』　7,147,154,161,167,200～202
太虚　12,13,51,70,73,75,89,119,186,195
太虚神道　21,72,73,86,89,195
太虚神明　13,21
太極　71,88,186
『太平記評判秘伝理尽鈔』　27,28
「太平記読み」　28
『橘の薫』　49
男色・同姓・縁親の喪　40,41,84,85,194
治国平天下の教え　102,103,114,118,197
知・仁・勇　5,59,61,107～109,114,122,124,128,149,150,161,195,198,199,201
中庸(心法)　119,121,198
中庸精微の教え　19,20,22,193
『中庸』　5,47,71
『中庸小解』　6,118,121,128,197,198
天子　16,17,22,67,72,75,123,124,148,149,153,169,199
天地同根　72,73,89,195
天道　15,16,21,22,56,107,118,119,121,123,171,172,176,198
天皇　6,59
天命　13,16,26,61,72,119～121,136,171,173,176,182,198
天理　15,40,70,73,90,91,109,171,172,175,195,196,203

な行

内侍所の神楽　153,154
人情時勢　76,78,91,196
人情事変　54,60,102,104,120,169,170,189,190,195,202

【事　　項】

あ行

生霊・死霊　55,56,62,194
『池田光政公伝』　25
『池田光政日記』　48
石山仮学館　27,37,40,194
委任論　26,32,33,41
淫祠の淘汰　37,40,194
宇宙の創造原理　13,21,168,193,203
『易』　21,70,88,89,186,188
『易教小解』　7,181,188～190,202～204
岡山藩　7,26,27,47～49,54,154～156,197
『翁問答』　3,7,11,21,47,52,56,60,72,78,123,168,193,194,197,199,203,204

か行

格物致知　51,70～73,89,195
片上手習所　85
間思雑慮　18,71,73,89,195
飢饉対策　35,36,48,160
気質変化(―説)　17,69～71,73,78,79,82,88,89,123,128,147,173,193,195,199
鬼神　12,55,56,62,68,70,88,89,93,99,118,119,121,167,168,188～190,194,196,198,203,204
究理　69,70,88,195
キリシタン神道請　37,40,79,86,194
キリシタンの請人　101,103,197
公家文化　151,152,201
君子　17,22,25,26,59～62,75,109,113,120～124,127,128,138,152,168,169,177,187,188～190,194,199
『繫辞伝』　181,185,188,190,202～204
経世論　4,73,78,91,109,110,113,114,160,173,195～198,201～203
『源語外伝』　47,54,58,66,194
『源氏物語』　4,54,83
“孝”イデオロギー　38,40,41,194
『孝経』　25,47,54,71,72,136
『孝経外伝或問』　167,170,173,177,181,202,203
『孝経小解』　167,177,181,202,203
洪水対策　36,41,193
孝弟忠信　68,77
五経　71
「古今士道論」　52
『古今和歌集』　25
心の神明論　102,103,197,199
五典十義　71～73,89,119,120,195
五倫　12～14,16,51,54,67,69,71,73,88,107,119,120,170,173,195,202
艮背敵応　20～22

さ行

三綱五常　75,77,78,87,91,196
三種の神器　5,107,108,114,150,153,161,198,201
三年の喪　6,68,70,85,87,195,197
寺院淘汰　40,79,86,194
仕置法度　18,19,22,78,193,194
四書　136
時所位(―論)　3,5,18,19,22,40,76,78,93,107,108,169,170,193,197,198,202
四書五経　13～15,22,193
『四書集註』　47
閑谷学校　82
七情(喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲)　119～121,181,182,203
至徳要道　11,12
自反慎独　69,70,88,195
島原の乱　29,33,47,193
『集義外書』　6,99,114,118,197,199,200
『集義和書』　4,6,200
　『集義和書』初版　8,66,78,79,82,85～87,194,195
　『集義和書』二版　6,8,82,86～88,91,93,99,194,196
『儒学雑記』　52

清水谷実業 155
朱子(朱熹) 4,69,88,100,195
舜 17,70,124,128,199
神武帝 148,150,200
杉山勘兵衛 155
荘子 106,108,198

た行

泰伯 5,149,150,160,200,201
平清盛 176,177,202
太宰春台 5
紂 123,124,128,199
津田永忠(重二郎) 37,155
程子(程頤・程顥) 69,88,100,195
徳川家綱 154
徳川家光 28,30,33,48,193
徳川綱吉 154,156
徳川頼宣 48
鳥羽院 175,177,202

な行

中三以 155,156
中江藤樹 3,7,11,13,15～19,27,47,52,56,60,72,78,168,193,194,197,199,203
中江虎之介 35,50
中川権左衛門 50
中院通茂 83,155,156
中院通躬 156
中村又之丞 50
野尻一利 47,154
野尻一成 53
野尻亀 47
野宮定基 156

は行

堀田正俊 154,155
本田忠平 156

ま行

牧野親成 53
松平忠之 156
松平信之 84,154～156
源頼朝 150,201
孟子 67

や行

山鹿素行 5
山崎闇斎 155
山本兵部 31
横井養玄 27

ら行

老子 88,106,108,198

索　　引

【人　　名】

あ行

天照大神(天照皇)　5,147～150,161,201,202
新井白石　5
伊木忠真　49
伊木忠貞(長門)　31
池田伊賀　31,37,39,84
池田大学　39,84
池田綱政(三左衛門)　30,31,82～84,154,155
池田恒元　31
池田輝録(政倫、八之丞)　27,36,48,49,53,82～84,155
池田由成(出羽)　29,31,33,48
池田政言　27,82,83
池田光政　7,25～41,47,48,50,79,82,84,86～88,93,154～156,193,194,196,197,199
石黒後藤兵衛　41
泉仲愛(岩田仲愛、八右衛門)　37,48,53
板倉重宗　30,33,34,37,47,48,84
市浦毅斎　26
伊藤仁斎　5
稲葉昌通　156
入江宗関　155
荻生徂徠　5
小倉実起　53
押小路公起　155

か行

加世八兵衛　50
川村平太兵衛　49
北小路俊光　154,156
喜多見重政　156
木下順庵　155
堯　17,70,124,128,142,199
京極高通　47
楠木正成　28
久世広之　83
久世通世　156
熊沢厚　48,54
熊沢いち　156
熊沢亀　54
熊沢載　48,54,84
熊沢左内　156
熊沢武三郎　53,156
熊沢継明　53,54,155
熊沢継義　53
熊沢でう　83
熊沢正興　48,54
熊沢万　54
熊沢守久　47
熊沢烈　155
桀　123,124,128,199
元政上人　53
孔子　25,67,91
後白河院　175～177,202
近衛院　175,177,178,202

さ行

酒井忠勝　30,33,34,48,193
酒井忠清　37,38,154
重仁親王　175,177,178,202

◎著者略歴◎

山田　芳則（やまだ・よしのり）

1952年，新潟県生.
同志社大学文学部文化学科卒業，同大学院文学研究科博士課程（後期）単位取得．博士（文化史学　同志社大学）.
現在，就実大学教授.
〔主な論著〕
『日本の近代化と維新』（共著，ぺりかん社，1982年）
『幕末・明治期の儒学思想の変遷』（思文閣出版，1998年）
「江木鰐水論」（『吉備地方文化研究』第10号，2000年）　他

熊沢蕃山の思想冒険（くまざわばんざんしそうぼうけん）

2014（平成26）年12月25日発行

定価：本体5,000円（税別）

著　者　山 田 芳 則
発行者　田 中　　大
発行所　株式会社　思文閣出版
〒605－0089　京都市東山区元町355
電話 075－751－1781（代表）

印　刷
製　本　亜細亜印刷株式会社

© Y. Yamada 2014
ISBN978-4-7842-1783-0　C3010

◎既刊図書案内◎

山田芳則著

幕末・明治期の儒学思想の変遷

山田方谷、阪谷朗盧ら主に吉備地方の思想家10名をとりあげ、幕末期の儒学思想の特質、近代西洋文明との接触による儒学思想の変容、明治期の儒学思想の課題、さらに儒学批判を通した明治期における西洋思想形成の過程を解明し、儒学が果たした地域的役割をも考察する最新の論集。

ISBN4-7842-0982-4 ▶A5判・258頁／本体5,600円(税別)

本山幸彦著

近世儒者の思想挑戦

林羅山・熊沢蕃山・貝原益軒・荻生徂徠・松平定信・佐久間象山・横井小楠……絶対的な道徳理念のもと、相対的な法を果敢に変革していった近世の思想家たち。彼らが取り組んだ課題が、いかなる歴史状況のもとで発生し、いかなる問題を抱くものであったのかを解明する。

ISBN4-7842-1304-X ▶A5判・314頁／本体7,500円(税別)

柴田純著

思想史における近世

〔内容〕近世思想史研究の課題と方法／近世前期における学文の歴史的位置／那波活所の思想／那波活所と徳川頼宣／徳川頼宣の藩教学思想／近世における法と理／近世初頭の社会と儒者／思想史における近世／宋明学の受容と日本型中華意識

ISBN4-7842-0650-7 ▶A5判・310頁／本体5,800円(税別)

川村肇著

在村知識人の儒学

近世後期在村知識人から、教育の近代化との関わりを考察する。〔内容〕民衆儒学と教育近代化／幕末維新期の民衆における漢学教育／儒学と農業／漢学教養の形成／儒学と救民行為／儒学と主体形成／崎門派の在村儒学と学校構想／在村知識人と近代化／結論と今後の課題

ISBN4-7842-0912-3 ▶A5判・278頁／本体6,400円(税別)

本山幸彦著

近世国家の教育思想

本書は、徳川幕藩体制期の教育政策を縦覧し、政治・経済・社会の諸条件と関連させながら、政治と教育の関係を明かす。『明治国家の教育思想』の姉妹編であり、両書により近世・近代400年の教育思想の流れを見ることができる。

ISBN4-7842-1069-5 ▶A5判・296頁／本体7,000円(税別)

ひろたまさき・倉田克直著

岡山県の教育史
都道府県教育史シリーズ15

各地域の特色ある教育・文化を紹介し、寺子屋・郷学校・私塾・藩校などの教育施設のほか社会・宗教・産業教育などにもふれ、古代～明治前期を扱う。各地域の教育・文化に貢献した人物から、教育的事跡を紹介。付録として教育史年表・参考文献・地図などを収録。

ISBN4-7842-0502-0 ▶四六判・382頁／本体1,800円(税別)

思文閣出版 (表示価格は税別)